



ピクタインダウシ

(おさみがりにぼし)

第3号

発行日 2015年11月1日

発行人 矢代 シイ

秋田市御野場7-1-29-305

山、四月

深い谷をのぞく

谷間から吹きあがる冷たい風は

弧をえがいて舞いあがり

やがて白い山頂へ

振りかえって下界を見おろす

墨色の雑木林のむこうは

うす紅色の花の雲で霞み

恍惚として……

心の開放弦ではじかれる

光の声を

絹上布のように身にまとう

わたしは待っている

わたしを見あげる人を

季節はすぐ初夏をむかえる

春

春はいつでもかすかに笑むように

未来のほうからやってくる

空は太陽の光に

ふつくらとして見える

トンビが空にまるやかな線をか

ときおり

春を呼ぶようにほがらかに

口笛を空にこがす

立ち木に身をよせるカラスは

ことばを割るようなおめき声を

木の高さからこぼしはじめた

土手の枯れ芝のあいだから

やわらかく

青い顔をのぞかせている草の

呼吸をすずかに楽しむ わたし

ふと

きらめく雄物川の

ふくらむ水面を

一本の棒が

左から右へ

走るはしる

川向こうの土手の白い車が

くきやかにうつる水鏡の不思議

水の旅をみおくる水門は

沈黙をかかえたまま口を大きくあけている

青磁色のまなざしはゆるりとよどんでいる

透明な記憶を忘れて――

とおくの山々は

猛々しい生きもののように

濃い精気をはなっている

空につながる稜線は

境目を鋭く切りわけ

黒くうねる山のかたい背骨を際だたせている

空も
大地も
いのちの根っこも
動き
はじめた



流れる

春

空からこぼれる光のカーテンがゆれ
あたたかく漂う陽の香りが
雪山を目覚めさせる

やさしく愛撫する光に

雪はゆるみ

ますます蕩とろけていく

滴は恋歌のように

春のよろこびを奏でる

プツ プツン プツ ツプン トポーン

日ごとに心はずませる山

雪消水は

逃げ去る岩魚いわなのように

急な溪流きせきの階はしを泳いでいく

川面に

光る鱗片

羽ばたく陽が

躍る

はねる

水は旅する妖精だ

スップスップ ユラプス ユラスプ



忘れ水

森の裏葉色の空に

漉されてくるのは

乳色の光

ホーホー ホッホー

時折

キジバトの声

いつそこの静寂――

茂みのなかに

鮮やかに咲くアザミ

紫紅色の鈴といっしょに

唄っている

ふさふさした髪のような草の波

のかたわらを

絶え絶えに流れている

かつてのわたしのような

忘れ水

水よ

あなたは

鳥や虫のコトバを

忘れているのだろうか

花といのちの交感をするのを

忘れたのだろうか

木とあそんだ時間ときを

忘れてしまったのだろうか

おもむろに

わたしは

水に手をひたす

指先に

水の意志を感じる

わたしのなかを流れていた記憶

と共鳴する

忘れ水の開放弦をつまびくと

向かいの山は

緑が滴ったような

まばゆい色合いをみせ

恍惚とした雲は

夢みごこちの風情でたゆたう



水の人

—— 忘れ水 II ——

ブナの葉洩れ日がゆらめく午後

ほーほー ほっほー

キジバトの声のするほうから

近づいてくる足音がして——

白い美しいスズランの匂いのように

かすかな香りをただよわせて

あなたは

紫紅色のアザミのまえで立ちどまる

茂みにひざまずき

じっと

わたしをのぞきこみ

おもむろに

ほそい指先で

わたしの肩にふれた

たえだえに

忘れられたように流れるわたしに

(水になりたい)

と あなたはつぶやく

あなたは

透明なことばで語りかける

そして

みずからの精神こころを水で満たす

水を生きるわたしの記憶

と一つに溶けあい

あなたも

水を生きる人になる

やさしい人

水の人よ

母の手紙

(父) ヒト喰ったごどあるが？

(へびどがネズミは？)

幼児の私の問いに

何も答えなかつた 父

亡くなって四十四年

命日の一月には

甘いものも好きだつた父へ

毎年 饅頭を送っている

父の思い出を母に尋ねたところ

思いがけず長い手紙が届いた

(へば そうすれば 夫 おと の話) 聞かされるがらな

夫は五人兄弟の長男

早くに母親を亡くし

妹 わらし 弟 めらし たちは奉公人 わがせ に子守

難儀した夫は働き者だつた

昭和十八年九月十五日

神社のお祭りの日に召集令状がきて

砲兵入隊で弘前サ発つて往つた

(おれは身持ちに三歳の子供 わらし いで

面会サ行けなかつたのしや

夫は移動中に

夜汽車の暗幕から び 少し あつて覗いたら

B 29 が 空の穴から

炎 たくせん えつぺ降らせだつたんだど

(なんぼ どんなにか が おつかね か えが た ったべ な な

暑さ負けがひどい夫は

北方の部隊に

佐世保から上海・満州へ

(南方サ行つた人は全滅) む かわい じ そう だ た った な な

二等兵の夫は往復ビンタくらつたり

物盗まれましたんだども

(復員して困つたことがあつたら

報せてよこせ

受け持ち隊長が

言つてくれたごどもあつたど

昭和二十一年五月十日 やつと復員

姉っコなの 夫の顔見て

背中サ隠れでしまつたんだよ

夫は赤紙で 心コべつちやんと潰されて
したんて おめサ 話コさねがつたんだべな

今年三月

母も九十六歳で亡くなつてしまつた

生前 雪のない街で一冬を過ごした

母の言葉を思い出した

(あく 持つて歸りてな

この青空を

でっけえ風呂敷さくるんで

私は晴れ渡つた空を包んで

母の墓前に供えた

徒然のエチュード

1

雪の模様のなかを

一本の直線がはしる

新年はここ

去年はあちら

2

母から健康を気づかう

長い手紙がとどく

自分のしあわせは

いつも後回しにして

3

母とお別れをした

哀しみの感情を

なんども漂白し

天日にさらす

4

レース模様のむこうに
浮かびあがる悲しみ
思い出が
波形にふくらむ

5

へおはよう
母の写真に挨拶する
へりよっこ
ほほ笑んだ母の声がきこえる

6

季節のきざはしの下を
無数の時がすばやく駆ける
新しいわたしに
あいたくて

7

電線に
鴉がくつろいでいる
一本の綱を上手にあやつる鴉は
軽業師

8

五月の第二日曜日
萱草色かんぞういろのスカートに目がとまった
デパートには
とおい日の母がいる

9

雨の日には
墨のおいが立つもの
穂先から芽吹く
一文字 萌

10 家のなかが臭い
死体が隠されている？
台所の隅
死んだのはわたし？

11 ブナの森を歩く
彫られた相合傘
ふたりの関係は
樹の成長しだい

12 よじのぼり はいつくぼり
ひたすら のぼりつめる
山のとつぺんは
地球のコブ

13 雲のあいだから
下界が見える
心の頂からは
ガガーン色の宇宙が見える

14 計算が早い 掃除ができる
歌って踊れる 介護もできる
けど 笑い皺ができない
ボクはロボット 寂しい！

15 白波の五線のうえに
鷗があそんでいる
~~~~~ 休符のかたち  
休んでいるのかしら……

16

わたしは

蒸気

抱きあう熱で

沸騰する

17

詩は仕事なの？

趣味だよ

おもしろいの？

難しいから楽しいのサ

18

代赭色の山男が奏でる

ハーモニカの「埴生はにゆうの宿」

五人の聴衆が口ずさむ

夏のコンサート

19

ひあああゝ

狂えるほどの美しさ

ポピーレッドの

妖花

20

スイカズラには

葉わきに二個のしろい花

あまやかな香り

うつくしい女の声がる

21

手は 卵形

顔は 唇形

衣は 緋色

サルビアが 燃える

22

あまづっぱく熟れたグミ  
ダラリと下がった乳首  
手を伸ばし　しゃぶると  
男は母親の記憶につつまれる

23

えゝ　打ち震える愛　　うゝ　　滲む愛  
おゝ　解放の愛　　あゝ　　宇宙への愛  
いゝ　凧の愛  
猫の運動！

24

コスモスの波がしらに  
目をさえぎられ  
トンボは  
うす紅色の海に不時着した

25

川の流れば  
ひらがなの　し　のかたち  
ひかりの小舟は  
海を目ざして……

26

言葉のなかに迷いこむと  
どこへ向かっているのか  
どこで乗りかえるのだったか  
忘れてしまう

27

額縁の絵の主張は  
つねに高貴  
部屋の一番めだつところを  
求める

28

手のレントゲンをとる  
かくれていた私の芯が  
つぶさに  
骨太！

29

もうこれ以上は……  
恥じらいの声  
肌もあらわな  
路傍の裸木

30

黒豆を煮る  
釘を入れる  
いつのまにか わたしも  
母親になっっている

## 脱皮

古い皮脱ぎ捨てぬぎすて生きていく蛇もくねく  
ねぬぎすてる蛙びよこびよこ蛇みによるによる蛇  
は匂いをかぎつける蛙いないか帰ったかねぐら  
の洞にかえったか

すけすけすける蛇の皮レースのカーテン花模様  
ゆらゆらゆれる窓辺のブランコひいふうみいよ  
う小暗くなつてこぐらかる綱

いきで生きるいきのびるマムシシマヘビヤマカ  
ガシぬがない蛇はほろぶから新しい絹きぬの衣をま  
とう



## あなたを思い出すとき

(痛い)

あなたはそう言った

十月

ゆたかに咲きにおう薔薇をまのあたりに

あなたは手をさしだした

(イタイ)

針の痛さを感じた

白い皮膚の内部からにじみでる

一しずくの憂い

傷口は悲劇への入口であった

棘の恐怖に あなたは嘆きながら打ち沈む

やがてサナトリウムに

蒼ざめたあなたの姿が……

時の茂みにわたしが迷ったとき

ビロードの花弁の内部から流れでる

ひらかれたあなたの言葉をきく  
あふれる感受の薔薇……

わたしはあなたとともに  
言葉の旅する



## 水をまとう

島がひとつ　そして　銀青いろの海と  
水平線の弧

波間に

忽然と　消えては　さらに　あらわれる  
波にほどかれた　長い髪の毛

ゆたかな胸　くびれた胴　ひかった脚……  
だれもないかのように

女は　みずみずしく　ふくよかな曲線を  
水のうえに　はじかせる

真夏の　熱いひかりを　攪拌するように  
女の鎖骨は　夢幻の　三角の湖

女は　水布をひろげ

水の　生命の　記憶を舞う

手は花

心は水

体は風

罔象みづはまの踊り

瞳は　まぶしいような　ふかい喜びをたたえ……

女神は　海の水を　両手ですくい

そっと　静かな息を吹きかける

そして　掌の鏡に　夢を映しだす

女神は　水をまとい

血の火照り

熟れた時間

を

しずめる

\*罔象は水の神・精



【あとがき】

詩友の皆さまから創刊号、2号の感想を多く寄せていただいた。

\*

・ご自身の小さな庭園に何の制約もない世界をつくってみたいという趣旨に共感します。

・挑戦しつづけることはとても大切と思います。個人誌ではそれが思い切り出来るでしょう。詩の型を破って、言葉を破って新しい世界に出て下さい。

・「耳鳴りて話ちぐはぐ山粧う」は秀句です。文学的カテゴリーがあるのはすばらしい。

・「コスモスの丈より低く老いにけり」「たそがれの道なりえこの狂い咲き」など、特に九句が「いいなア」と感じました。

・親を見つめ直し親の感性や生き方を作品から汲みだそうとする姿も素晴らしい。個人誌を持っているかいないかでは、前に進みだす時間が違ってきますか

ら、個人誌の良さを十分引き出した例かもしれませんね。

・九十すぎの方の句とは信じられない程です。力強い男まさりの雅句のように感じられました。

・個人誌を継続するのは大変なこと。無理をしないで、気ままにやってください。不倒女に乾杯。

\*

寄せられた感想は、母の写真に供えました。ありがとうございました。ございました。

温かい励ましのおことばに元気をいただきました。これからも倦まず弛まず詩と真正面から向き合い、詩の領域を広めていきたい。

